



在日中国人の孤独感に対する捉え方と対処に関する 予備的検討 : 自由記述の分析を基に

林, 萍萍

(Citation)

国際文化学, 37:119-129

(Issue Date)

2024-03-18

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487653>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487653>



在日中国人の孤独感に対する捉え方と対処に関する

予備的検討¹⁾

—自由記述の分析を基に—

Examination of the Perception and Coping Strategies for Loneliness among Chinese Residents in Japan

: Based on an analysis of the free description

林萍萍

LIN Pingping

Summary

This study investigated the perceptions and coping strategies for loneliness among 111 Chinese residents in Japan through a questionnaire survey. To measure loneliness, we used a direct question that used the word “loneliness” and an indirect question that asked three questions without using the word “loneliness.” Approximately 50% of respondents reported feeling lonely in the direct question, compared to 40% in the indirect question. Text-mining analysis of the free descriptions revealed that loneliness was often associated with a lack of interpersonal connections, such as “no one who understands or sympathies,” “few social contacts,” “acting alone,” and “being away from parents.” On the other hand, there were also several positive descriptions, such as “self-enjoyment,” “own time,” “subjective and needs to be felt,” and viewing loneliness as a normal part of life, such as “life experience/state” and “inevitable.” Furthermore, coping strategies for loneliness included “entertainment and leisure,” “activities and outdoor activities with friends,” “indoor activities,” and “communication with friends and family.”

キーワード

在日中国人、孤独感、対処、自由記述、テキストマイニング

I はじめに

コロナ禍において、外出自粛やソーシャル・ディスタンスの規制により、他者とのつながりは断絶せざるを得ず、人々が社会的孤立に陥り、孤独感を感じやすい懸念が高まっている。この状況を受け、2021 年 2 月 19 日に日本は、イギリスに続いて世界で 2 番目に孤独・孤立対策担当室を内閣官房に設置した。

内閣官房孤独・孤立対策担当室(2022, 2023)は、日本全国の満 16 歳以上の個人 2 万人を対象に「孤独・孤立問題の実態調査(以下、全国調査)」を実施したところ、孤独感を感じている人の割合は、2021 年では 36.4%、2022 年では 40.3%となっている。一方、18 歳以上の中長期在留者および特別永住者を対象とした「在留外国人に対する基礎調査」(出入国在留管理庁, 2022, 2023)では、孤独感を感じている人の割合は、2021 年では 51.1%、2022 年では 49.4%となっている。いずれの時点でも、在留外国人は日本人よりも高い孤独感をもっていることが示唆された。

在留外国人は異文化適応の問題に加え、日本でのネットワークが限られ、もともと社会的孤立や孤独に陥りやすい層である。また、コロナ禍で、孤独になるリスクがさらに高まり、言葉や文化背景などの問題で、声を上げられず、周囲に気づかれにくい社会的孤立となる在日外国人が増加していると推測される。在日外国人は、COVID-19 による入国制限の影響で一時はやや減ったが、2022 年末に再び増加に転じ、2023 年 6 月末には過去最高の 322 万人(出入国在留管理庁, 2023)となった。多文化共生社会を構築するにあたって、孤独・孤立のリスクが極めて高い在留外国人に対してさまざまな予防対策が喫緊の課題であるといえよう。

これまで在留外国人が孤独感に陥りやすいことが指摘されてきたが、在留外国人がどのように孤独感と向き合うのかについてほとんど検討されていない。そこで、本研究では、在留外国人のうち最も高い割合を占める在日中国人を対象として、彼らが孤独感をどのように捉えて、日頃に孤独感とどのように向き合っているのかを検討する。

II 先行研究

ここでは、孤独感の定義と、孤独感の捉え方および対処に関する先行研究をまとめる。孤独感の主観性と多様性により、さまざまな定義が提唱されてきたが、いまだに統一されていない。Peplau & Perlman(1982)は、多くの研究者の定義をレビューし、それらの定義に共通する 3 つの特徴をあげている。すなわち、孤独感は、「人の社会的関係の欠如から生じるものである」、「主観的な経験であり、客観的な社会的孤立と異なる」、「不快で苦悩を与えるものである」。

これまで、孤独感是不快でネガティブな経験として捉えられてきたが、孤独が必ずしもネガティブな経験とは限らないと主張する研究者もいる。Moustakas(1961, 飯鉢訳 1977)は、「孤独は、人に人間性を保持させ、広げさせ、深めさせる、人間たる経験である」と述べている。また、落合(1999)は、孤独感には、淋しいとか暗いといった孤独感ばかりではなく、明るく充実した孤独感もあると指摘している。具体的には、孤独感とは、「人間同士の理

解・共感についての感じ(考え)方」と「孤独(自分の存在の仕方)への目の向け方」という 2 つの側面がある。後者には、「孤独であることを避けている」という捉え方だけでなく、「孤独であることを楽しみ、引き受けている」のように、孤独であることを目に向けて楽しんでいるという捉え方も含まれている。さらに、大東・岩元(2009)は、日本人大学生を対象に、孤独に対する捉え方について自由記述させた結果、孤独感を、「辛いものだ」「悲しいものだ」といった「否定的評価」、「楽しい」「楽だ」といった「肯定的評価」、「人を成長させるものだ」「自分を強くするものだ」といった「自己成長機能」の 3 つの側面から捉えられていることが明らかになった。一方、中国国内の研究を概観したところ、「社会的関係の欠如によって生じる不快な主観的経験」という既存の孤独感の定義を用いた研究が多く、中国人の孤独感の捉え方に関する研究がほとんど行われていない。

孤独感についての対処行動については、Rubenstein & Shaver(1982)が開発した「反すうと受動的回避的対処」「感情表出と社会的対処」「建設能動的対処」の 3 因子に基づく尺度を用いて、中国人大学生を対象とした鄧・王・鄭(2007)の研究では、性別、都市と地方、専門科目による違いがみられた。また、同研究では、「感情表出と社会的対処」と「建設能動的対処」は孤独感の軽減に寄与するのに対して、「反すうと受動的回避的対処」は孤独感を増大させると報告された。また、Xie et al.(2021)は、中国の大学生を対象に質問紙調査を行ったところ、孤独感への対処行動として、「対人接触」「気晴らし」「忍耐・待機」「SNS の利用」が得られた。一方、在日中国人を対象とした研究が見当たらない。

III 方法

調査協力者 日本にいる中国人 111 人(男性 34 人、女性 77 人; 平均 28.0 歳、標準偏差 5.3)であった。

質問紙 質問内容はフェイスシート(基本属性などに関する項目)、周りの人との付き合いやサポート、孤独感に関する項目から構成されている。フェイスシートについては、年齢、性別、在留資格、来日の年数、同居者の有無、日本語の能力などに回答してもらった。

孤独感については、内閣官房の調査(2022)を参考にして、孤独感を直接的に尋ねる設問と間接的に尋ねる設問を設けた。直接設問は、「過去 1 ヶ月間、あなたはどの程度、孤独であると感じることがあります」という 1 項目(「決してない」から「しばしばある・常にある」の 5 段階)で尋ねている。間接設問は、「UCLA 孤独感尺度」(Russell et al., 1978)の 3 項目短縮版(「自分には人との付き合いがない」「自分は取り残されている」「自分は他の人たちから孤立している」)を「決してない」から「常にある」の 4 件法で測定した。また、「孤独感とは何か」について、「孤独は()」から始まる文章を 5 つまで作成してもらった。さらに、「孤独感を感じた際にはどのように対処するのか」について、自由記述してもらった。

手続き 中国の間巻星というウェブサイト上でアンケートを作成した。中国の Wechat などの SNS を用いて、アンケートのリンクを対象者に送付して、回答を収集した。質問紙調査は匿名で行った。調査時期は 2023 年 3 月～4 月であった。

本調査は、事前に調査協力の同意が得られた参加者のみを調査対象者として実施した。調査に対する同意に関しては、アンケートの提出をもって研究への同意とみなした。なお、本

調査は、大阪商業大学の「研究活動管理・監査委員会」の承認を得て実施した。

IV 結果と考察

まず、調査対象者の基本属性についてみる。在留資格をみると、留学が約 6 割、「高度人材」や「技術・人文知識・国際業務」が約 4 割であった。来日年数は、3 年未満が約 3 割、3 年以上 10 年未満が約 6 割、10 年以上が約 1 割であった。同居者の有無は、一人暮らしが約 65%であり、同居者がいる場合は、配偶者との同居が多い。日本語能力(話す・聞く)は、約 5 割以上の回答者が日本語を効果的に使用でき、高い日本語能力をもっている。

4.1 在日中国人の孤独感の程度

孤独感を直接的に測定する項目では、孤独感を感じている人の割合(「常にある」+「時々ある」+「たまにある」)は、51.3%であった(図 1)。この割合は、2022 年 12 月に実施した日本の全国調査(内閣官房孤独・孤立対策担当室, 2023)の約 40.3%よりも約 10 ポイント高くなっている。

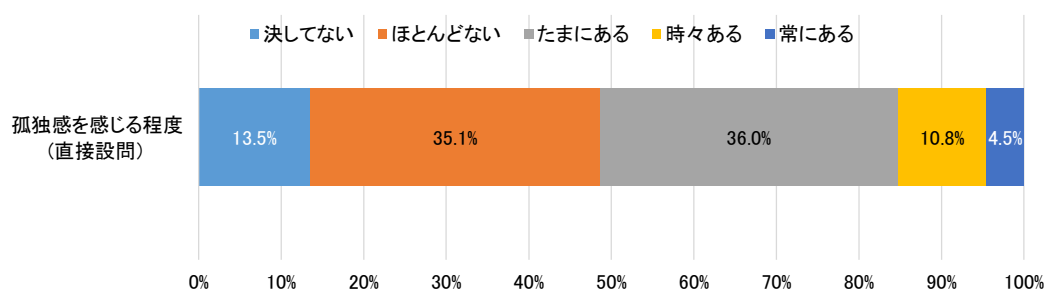


図 1 孤独感の直接設問

一方、孤独感を間接的に測定する 3 つの項目について、全国調査を参考にして、「決してない」を 1 点、「ほとんどない」を 2 点、「時々ある」を 3 点、「常にある」を 4 点とし、その合計点を、「10~12 点」(常にある)、「7~9 点」(時々ある)、「4~6 点」(ほとんどない)、「3 点」(決してない)の 4 区分に分類した(図 2)。その結果、合計点 7 点以上の割合は 39.6%であり、2022 年 12 月に実施した日本の全国調査(内閣官房孤独・孤立対策担当室, 2023)の 48.7%よりも約 10 ポイント下回っている。

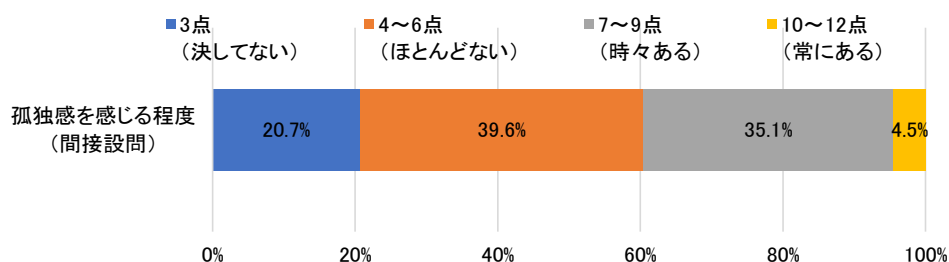


図 2 孤独感の間接設問

全国調査では「孤独感」という言葉を使用しない間接的な聞き方のほうが、直接的な聞き方よりも、孤独感を感じる割合が高くなっている傾向がみられた。これは、本人も自覚しきれていない孤独が、リアルな状況ではより明確に浮かび上がる可能性を示唆している。在日中国人を対象とした本研究では、逆の傾向がみられ、直接的な聞き方が間接的な聞き方よりも、孤独感を感じる割合が高いことが示された。これは、在日中国人にとって、孤独感を明示的に認識しやすい場合が多い可能性を示唆している。

前述のとおり、本研究では、在日中国人の孤独感が日本全体の平均よりも高い可能性が示唆された。一方、林 (2023) は、国際比較調査グループ ISSP (International Social Survey Programme) が 2017 年に実施した調査のデータ (本国在住の日本人 1,609 人と中国人 4,219 人) を分析した結果、両国の孤独感の程度に有意な差がみられないことが示唆された。具体的には、日本人と中国人の両方とも、孤独感を感じている割合 (「ときどきあった」 + 「よくあった」 + 「かなりよくあった」) は 2 割程度であり、本研究の在日中国人の結果をはるかに下回っている。ただし、両研究では、孤独感尺度の評価手法および調査時期が異なるため、直接比較することはできない。本研究では、UCLA 孤独感尺度 (Russell et al., 1978) の 3 項目を 4 件法で測定しているが、林 (2023) では、同尺度の 3 項目を 5 件法で測定している。

4.2 在日中国人の孤独感の捉え方

自由記述の分析には、KJ 法がよく用いられている。KJ 法とは、意味的に近いデータ同士をグルーピングし、いくつかのカテゴリを作ることによってデータの全体像を捉える手法である (川喜田・牧島, 1970)。しかし、KJ 法では、分析者がテキストを読んで、全てのデータを手作業で分類する必要がある。複数の分析者が別々に分類を行い、一致率を測定する方法で客観性を高めることもできるが、分析者の主観的解釈や熟練度に依存する度合いが高いことは否めない。

本研究では、孤独感に関する約 500 個の記述文を収集した。上記の KJ 法の限界点を踏まえて、分析者の主観的解釈を伴わずに結果の客観性を担保でき、潜在する規則性や類似性を探索することができるテキストマイニングを用いる。

テキストマイニングの解析ソフトの一つに、樋口耕一 (2020) が開発・公開している KH Coder というフリーソフトウェアがある。KH Coder では、文章形式のデータから、自動的語を切り出し、多変量解析によって全体を要約し、全体の傾向を把握することができる。本研究では、最新の KH Coder である、2022 年 8 月 4 日にリリースされた Version3 を用いて、記述の解析と客観化を試みた。

分析にあたっては、まず、誤字脱字や表記の揺れなどを修正してデータのクリーニングを行った。次に、KH Coder でデータを読み込んで「前処理」を行った。

孤独感に関する自由記述のデータを分析する際には、まず著者がすべての記述を日本語に翻訳した。翻訳の正確性と適切性を担保するために、日本語がネイティブレベルで在日 10 年以上の中国語ネイティブスピーカー 1 名に確認を依頼した。

4.2.1 孤独感の捉え方に関する頻出語リスト

「孤独感とは何か」に関する自由記述について、頻出語を抽出した。前処理を実行した結果、総抽出語数は 3,478(使用数 1,892)、異なり語数は 793(使用数 682)であった。ここでは、「抽出語数」とは分析対象テキストから抽出された「語」の数であり、「使用数」とは分析に使用する「語」の数である。「語数」と「使用数」の差は、一部の品詞を分析していないためであり、KH Coder の自動判断により、「助詞」「助動詞」などは分析対象から除外されている。また、品詞により言葉が分割されることで意味が変わる語について、「一人で」「いない」「分かち合う」「分かち合える」を、分析前処理の段階で「強制抽出する語」に指定した。

頻度順で抽出した際の上位 50 位の語とその出現頻度を表 1 に示す。出現回数が 30 回を超えている語は、「いない」(100 回)が最も多く、次いで「人」(77 回)、「一人で」(58 回)、「自分」(44 回)であった。これらの語の使われ方をみると、「いない」は「付き合ってくれる人がいない」「理解してくれる人がいない」「相談できる人がいない」など、「〇〇の人がいない」という表記が多くみられた。「一人で」は「一人で買い物」「一人で食事する」「一人で映画を見る」など、「一人で〇〇をする」という表記が多くみられた。また、出現回数が多かった語は「感情」「理解」「共有」「必要」であり、いずれも 15 回を超えていた。

表 1 孤独感の捉え方について抽出された頻出語リスト(上位 50 語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
いない	100	周り	8	買い物	5
人	77	心	8	友人	5
一人で	58	避ける	8	ネガティブ	4
自分	44	状態	7	雨	4
感情	24	相手	7	映画	4
理解	19	相談	7	海	4
共有	17	聞く	7	楽しい	4
必要	15	話す	7	感覚	4
友達	14	時間	6	気持ち	4
一緒	13	主観	6	空間	4
人生	13	食べる	6		
感じる	12	食事	6		
経験	12	悩み	6		
家	11	悲しい	6		
見る	11	離れる	6		
自己	11	話し相手	6		
行く	10	悪い	5		
社会	10	享受	5		
家族	9	自由	5		
幸せ	8	親	5		

4.2.2 孤独感の捉え方に関する共起ネットワーク

抽出後の出現頻度と抽出語同士の関連性を要約するために、共起ネットワークの分析を行った。共起ネットワークとは、出現パターンの似ている語、抽出語間の共起性の強さをネットワーク図で可視化するものである。共起ネットワークでは、単に語同士が近く配置されているだけではそれらの語の間に強い共起関係があるとは認められず、語同士が線で結ばれている必要がある。さらに、共起性の分析を行うことが目的であるため、出現回数が多くても共起性が低い抽出語は表示されない。本研究の分析では、関連性の強さを示す共起関係

の算出には Jaccard 係数(0.2 以上)を使用し、描画する共起関係の絞り込みを描画数 60 と設定し分析を行った。

共起ネットワーク図では、比較的強く相互に結びついている語を自動的に検出し、グループ毎に色分けして示される。例えば、ある語の背景が白で黒い丸い囲み枠であれば、その語は他の語とグループを形成していないことを表している。また、円の大きさは出現語の頻度の高さを示し、円と円を結ぶ線の太さは共起関係の強さを示している。

孤独感の捉え方については、抽出語の最小出現回数を 5 回とした。共起ネットワークの分析を行ったところ、10 個のサブグラフが得られ、円の大きさと抽出語の出現回数を目安を右側に示した(図 3)。

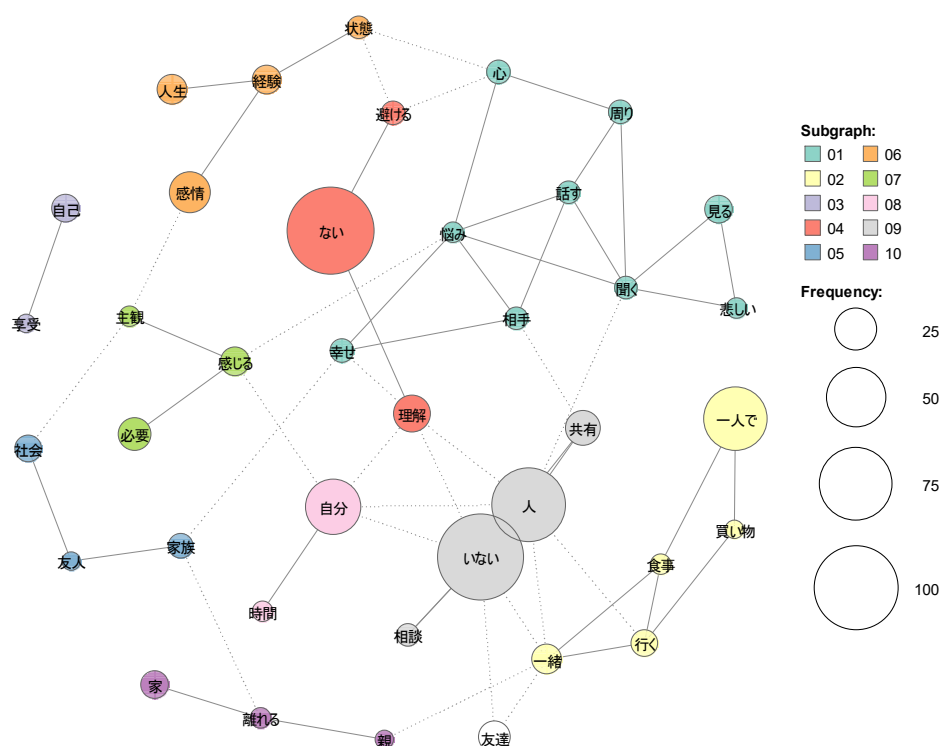


図 3 孤独感の捉え方に関する共起ネットワーク

まず、出現頻度の多い抽出語を含む 08 グループと 09 グループを確認する。08 グループでは、円の大きいものから「ない」「理解」が含まれており、「誰にも理解されない」「誰も理解してくれない」に関する記述が最も多く、自分の理解者がいないと要約できる。また、09 グループでは、円の大きいものから「いない」「人」「共有」「相談」が含まれており、「相談できる人がいない」「喜びを共有できる人がいない」「感情を共有できる人がいない」などの記述が多かった。両グループのキーワードのつながりから、「理解者・共感者がいない」と要約できる。

一方、01 グループでは「悲しい」「見る」「聞く」「話す」「周り」「話す」「相手」「心」「悩み」「幸せ」が含まれており、「悩みを聞く/話す相手がいない」「話したいときに話せる相手がいない」などの記述が多く、「付き合いが少ない」と要約できる。

同様に、グループごとに抽出語のつながりをみていくと、05 グループでは「感情」「人生」

「経験」「状態」が含まれており、「主観的感情」「人生経験」「誰も経験する状態」「避けられない状態」などの記述が多くみられた。また、06 グループでは「主観」「必要」「感じる」が含まれており、「主観的に感じている」「人生において必要なステージ」などの記述が多くみられた。両グループをまとめると、「孤独感の主観性と常態性・必要性」と要約できる。

また、07 グループでは「自分」「時間」が含まれており、「一人の時間」「自分に時間を与える」「自分と対話する時間」などの記述がみられた。03 グループでは「自己」「享受」のキーワードが含まれている。両グループをまとめると、「自分享受の時間」と要約できる。

02 グループでは「一人で」「買い物」「食事」「一緒に」「行く」が含まれており、「一人で買い物に行く」「一人で食事に行く」などの記述が多くみられ、「一人での行動」と要約できる。

最後に、10 グループでは「家」「離れる」「親」が含まれており、「孤独感とは家を離れること」「孤独感とは親から離れること」に関する記述が多くみられ、「親元から離れる」と要約できる。

4.3 在日中国人の孤独感の対処

4.3.1 孤独感の対処に関する頻出語リスト

孤独感に対する対処について、上記と同様に、頻出語リストおよび共起ネットワーク分析を行った。「孤独感を感じたときにどのように対処するのか」に関する自由記述について、頻出語を抽出した。前処理を実行した結果、総抽出語数は 1,265(使用数 656)、異なり語数は 357(使用数 288)であった。

表 2 孤独感の対処について抽出された頻出語リスト(上位 50 語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
見る	26	気	5	小説	3
自分	15	好き	5	生活	3
友達	15	散歩	5	相談	3
ゲーム	12	出かける	5	買い物	3
読む	11	話す	5	買う	3
聴く	10	アニメ	4	番組	3
友人	9	一緒	4	美味しい	3
音楽	8	人	4	紛らわす	3
家	8	勉強	4	誘う	3
家族	8	良い	4	サーフィン	2
行く	8	連絡	4		
食べる	8	SNS	3		
電話	8	スポーツ	3		
寝る	7	テレビ	3		
本	7	ビデオ	3		
お喋り	6	気持ち	3		
ドラマ	6	国内	3		
ネット	6	作る	3		
映画	6	自己	3		
孤独	6	趣味	3		

頻度順で抽出した際の上位 50 位の語とその出現頻度を表 2 に示す。出現回数が 10 回を超えている語は「見る」(26 回)で最も多く、次いで「自分」(15 回)、「友達」(15 回)、「ゲー

ム」(12回)、「読む」(11回)「聴く」(10回)であった。これらの語の使われ方をみると、「見る」は「テレビ番組を見る」「映像を見る」「映画を見る」「アニメを見る」といった回答であった。「自分」は「自分を忙しくする」「自分の内面を探求する」「自分の生活をもっと充実させる」「自分で消化する」など、自分の内面に焦点を当てる対処が多くみられた。

4.3.2 孤独感の捉え方に関する共起ネットワーク

孤独感の対処については、抽出語の最小出現回数を 3 回とした。共起ネットワークの分析を行ったところ、6 つのサブグラフが得られた(図 4)。

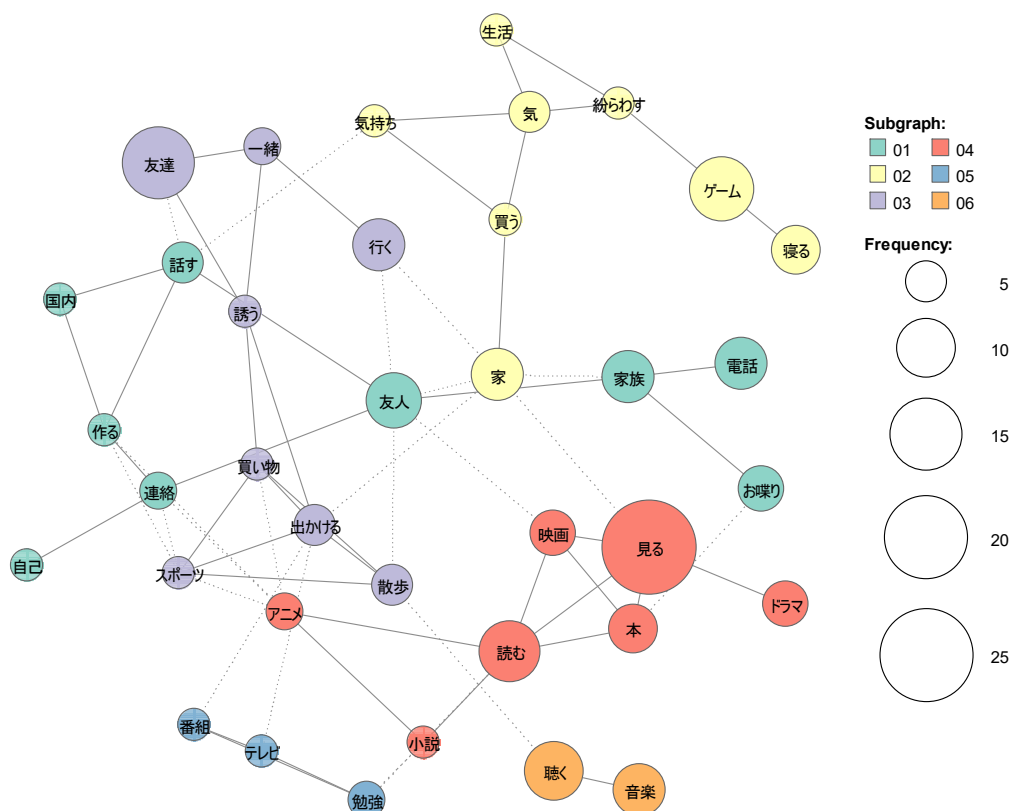


図 4 孤独感の対処に関する共起ネットワーク

まず、出現頻度の多い抽出語を含む 04 グループを確認する。04 グループでは、円の大きいものから「見る」「読む」「本」「小説」「映画」「ドラマ」「アニメ」が含まれており、「本を読む」「小説を読む」「ドラマ/映画/アニメを見る」に関する記述となっている。また、06 グループでは「音楽」「聴く」が含まれている。さらに、05 グループでは「テレビ」「番組」「勉強」が含まれている。上記の 3 つのグループをまとめると、主に「一人での娯楽やエンターテインメント」と要約できる。

次に、03 グループには「友達」「一緒に」「誘う」「行く」「買い物」「出かける」「スポーツ」「散歩」が含まれており、「友人を誘って食事/買い物に行く」、または「散歩に出かける」「スポーツする」に関する記述が多くみられた。「友人とのアクティビティやアウトドア活動」と要約できる。

02 グループには「ゲーム」「寝る」「気」「気持ち」「紛らわす」「生活」「買う」「家」が含

まれており、「家で寝る」「ゲームする」「自分にデザートを買う」「ゲームして気を紛らわす」に関する記述が多くみられた。どちらかという、家にいることで、「インドア活動」と要約できる。

01 グループには「友人」「家族」「電話」「お喋り」「国内」「話す」「連絡」「作る」「自己」が含まれており、「友人と話す/連絡する」「家族と電話する」「家族とお喋りする」に関する記述が多くみられた。「友人や家族とのコミュニケーション」と要約できる。

V 結語

本研究では、111名の在日中国人を対象に質問紙調査を行い、孤独感を感じる程度を回答してもらい、孤独感の捉え方と対処について自由記述してもらった。直接設問では、約5割の人が孤独感を感じていると回答したのに対し、間接設問では、その割合が4割となって、10ポイント低くなっている。この傾向は全国調査と異なっている。

一般的に、「孤独感」という言葉をそのまま使用する質問は、人々が自己認識している孤独感をより正確に捉えるのに有効である可能性が高いと思われる。一方、間接的な質問は、人々が自覚していない、あるいは無意識のうちに感じている孤独感を明らかにする際に有用かもしれない。さらに、「孤独感」を「恥」と捉える文化にも有効であると考えられる。しかし、在日中国人の場合では、直接的な聞き方のほうが孤独感をより正確に捉える可能性が高いことが示唆された。その背景には、異国に暮らしている外国人にとっては、孤独感を明示的に認識しやすい可能性がある。本研究の結果は、異なる文化や社会的背景を持つ人々を対象に研究や調査において、質問方法の選択が重要な意味を持つことを示唆している。具体的には、直接的な質問がより有用であるか、あるいは間接的な質問がより適切であるかは、特定の文脈によって異なる可能性がある。そのため、研究者は、調査対象者の文化や社会的背景を十分に理解した上で、適切な質問方法を選択することが重要である。

また、孤独感に関する自由記述をテキストマイニングにより分析した結果、「理解者・共感者がいない」「付き合いが少ない」「一人での行動」「親元から離れる」など対人関係の欠如に関する記述が多い。一方、「自己享受」「自分の時間」「主観的で感じる必要がある」のように、孤独感をポジティブに捉える記述や、孤独感が人生の常態として捉える記述も多くみられた。さらに、孤独感への対処については「娯楽やエンターテインメント」「友人とのアクティビティやアウトドア活動」「インドア活動」「友人や家族とのコミュニケーション」のカテゴリーが得られ、積極的に孤独感に対処している傾向がみられた。今後、本研究の結果をもとに、在日中国人の孤独感の捉え方および対処行動の尺度を開発し、その有効性を検証する実証的研究を行う。また、その結果をもとに、孤独感の捉え方と対処行動によって、孤独感がメンタルヘルスに与える影響がどう異なるのかを検討する予定である。

さらに、本研究の限界として、比較対象となるデータがないことが挙げられる。在日中国人の孤独感の程度や孤独感に対する捉え方および対処は、異国の日本にいていて影響を受ける可能性があるとも考えられる。今後、母国中国人を対象とした同様な調査を実施することで、異文化環境の影響をより明確に検証する必要がある。

(大阪商業大学公共学部 助教)

注

- 1) 本稿は、日本社会心理学会第 64 回大会で発表したデータを再分析して構成したものである。本研究は、公益財団法人ユニバーサル財団 2022 年度研究助成の助成を受けて実施した。

引用文献

- 大東美穂子・岩元澄子(2009). 青年の孤独に対する捉え方—孤独感, 自己意識, 精神的健康, 自我同一性との関連 久留米大学心理学研究, 8, 75-84.
- 邓丽芳・王瑞・郑日昌(2007). 大学生孤独感、应对策略与气质类型的关系 心理与行为研究, 5(2), 120-126.
- 樋口耕一(2020). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第 2 版 ナカニシヤ出版
- 川喜田二郎・牧島信一(1970). 問題解決学—KJ ワークブック法 講談社
- 林萍萍(2023). 孤独感の関連要因に関する日中比較—ISSP2017 を用いた分析 国際文化学, 36, 93-115.
- Moustakas, C. E. (著)(1961). 孤独 飯鉢和子(訳)(1977) 岩崎学術出版社
- 内閣官房孤独・孤立対策担当室(2022). 「人々のつながりに関する基礎調査(令和 3 年) 調査結果の概要」
- 内閣官房孤独・孤立対策担当室(2023). 「人々のつながりに関する基礎調査(令和 4 年) 調査結果の概要」
- 落合良行(1999). 孤独な心—淋しい孤独感から明るい孤独感へ—サイエンス社
- Peplau, L. A., & Perlman, D., (1982). “Perspectives on loneliness”, In L. A. Peplau & D. Perlman (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory* (pp.1-18). New York: Wiley.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Ferguson, M. L., (1978). “Developing a measure of loneliness”, *Journal of personality assessment*, 42(3), 290-294.
- 出入国在留管理庁(2022). 「在留外国人に対する基礎調査(令和 3 年度)調査結果報告書」
- 出入国在留管理庁(2023). 「在留外国人に対する基礎調査(令和 4 年度)調査結果報告書」
- 出入国在留管理庁(2023). 「令和 5 年 6 月末現在における在留外国人数について」
- Xie, Y., Kawata, Y., Kamimura, A., Shibata, N., (2021). “Comparison of Causes of Loneliness and Coping Behaviors Among Japanese and Chinese University Student Samples”, *Juntendo Medical Journal*, 67(1), 46-59.